

日風堂

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

第17号 1995年10月1日

刀剣展に思う

高知県銃砲刀剣類
登録審査委員

山本 俊夫

まず日本刀は、折れず、曲がらず、よく切れる。贅肉を除けた必要最少限のものでなくてはならない。そして「用の美」による崇高な姿は私達を魅了してやまない。刀剣学とは、其の衰退と受難の歴史を学ぶものであるという。

古代の直刀から「反り」のある美しい刀が何時の時代に出来たのであろうか。一千数百年以前に出現して、鎌倉時代に花開いて頂点に達し、それから次第に衰退したといわれている。

材料は「砂鉄」から取り出した「玉鋼」を主体としているが、近年の「溶鉱炉」で大量に造られる鉄は高温処理であるので適当でなく、低温処理した「和鉄」が良いのである。

地鉄・姿・刃文ともに最高に達した鎌倉時代のもを手に模造を繰り返しているが、姿・刃文は一応似せることは出来ても、地鉄ばかりはむずかしいのである。江戸時代の名工正秀が復古刀を唱えたが古刀に及ばなかったという。平安・鎌倉時代の鍛冶の行った製鉄法を探らなくてはならないが、まだ不明なところが多いといわれている。

刀は本来、武器として生まれたものであるから受難も多い。秀吉の「刀狩り」から始まり、江戸時代元和九年、寛文八年、元禄十一年と「長さ・拵え」にいろいろ制限が加えられた。又明治四年には「脱刀勝手」との布告があり、そして明治九年「帯刀禁止令」が発せられた。土族の反発も激しく「神風連の乱」の原因ともなった。これにより刀匠は勿論、これに付随する研磨師、塗師、金工師などすべて職を失って、ひとつの文化が終った。

更に昭和二十年、敗戦によって基本的に日本人は刀を所持する事を禁止された。所謂「昭和の刀狩り」である。いくら隠しても電波探知器を使い見付ければ強制労働と脅され、警察に出す者、土中に埋める者、切断する者等があり、莫大な刀剣類が失われた。この混乱は刀剣史上最大の悲劇となった。

其の後、先輩有志の努力により「美術刀剣」に限り所持を許可されることとなり、更に昭和二十八年には「伝統技術」保存のため文化庁の認定する若干名が作刀を許されて、漸く息を吹き返した。

刀は、如何に名工が打っても、「鍛冶研」のままではあの美観は見ることが出来ない。したがって、上手な刀匠と上手な研磨師との合作が名刀を造るのである。現在の研ぎは、何時の時代から完成したのであろうか。いろいろ説があるが、古代の「銅鏡」研ぎから発達したといわれている。それは上古の剣、直刀に立派な製品が出土していることで証明されよう。即ち上古より刀剣類が現われた同時期から発達したものであろう。幾種類もの砥石を使い根気と高度の技術と相当な日数を要する作業である。近年は「帯刀禁止令」・「昭和の刀狩り」などで刀剣類の数が激減したので、研磨師を志す若者が少なく、又これにかかわる職人の後継者不足等で刀剣界は誠に先行き心細い状況である。

刀剣展は、昭和五十年、県立郷土文化会館で「県文化財」を中心として開かれたが、今回は「土佐に関係あるものと維新の志士の佩刀」が展示される。故人の諺に「名刀は百万遍見よ」と言われる様に、一度見るより二度・三度と足を運び、歴史と刀剣のかかわり合いを考えていただきたい。そして、二度と生産されない先人の文化遺産が、できるだけ多くの人々によって鑑賞されんことを願う次第である。

企画展『土佐歴史と刀剣』 によせて

下村 公彦

はじめに

当館では、平成七年十月二十日から十一月二十六日まで企画展『土佐歴史と刀剣』を開催する。

古来、刀剣は戦闘用の武器として発達し、「武士の魂」としても重用されてきた。私達も、刀と言えはまず侍を連想する。一方、刀剣自体の姿と鍛えの美しさが見る者の心をとらえ、「鉄の美術品」としても評価されている。

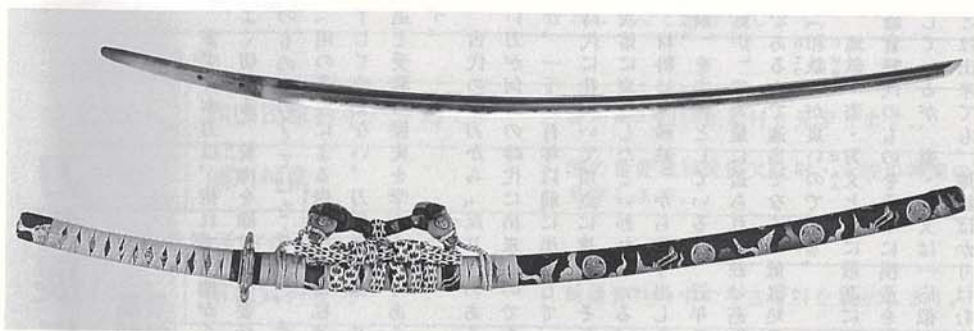
本展では、土佐の刀工の作品や藩主山内家に係る名品のほか、幕末の志士の刀剣など合せて二十七振を展示する。以下、その概要を紹介したい。



金銅莊環頭太刀 (環頭部、複製)

(一) 一つの太刀と三つの太刀

土佐の刀剣で全国的に著名なものとしては、まず金銅莊環頭太刀拵・太刀



太刀 銘 康光 附錦包糸巻太刀拵 (掛川神社蔵)

身(小村神社蔵)があげられる。この製作年代は環頭部の形状などから古墳時代後期と推定されており、刀身も「日本刀の祖流を思わせるものがある」と高く評価され、国宝に指定されている。(本展では複製品展示)

本展の主役は、次の三振の太刀(いずれも重要文化財指定)であろう。

(1) 太刀 銘備前国長船兼光

(2) 太刀 銘国時 附糸巻太刀拵

(3) 太刀 銘康光 附錦包糸巻太刀拵

(1)は、山内家の重宝で「一国兼光」の名で知られる。一説に、二代藩主忠義がこれを将軍家へ献上しようとするめられた時、「土佐一国にもかえ難し」と断ったことが、この名のおこりであるという。(本資料は、本年七月に山内豊秋氏より高知県に寄贈されたものである。)

(2)と(3)は、いずれも掛川神社の社宝であり、現在東京国立博物館に寄託保管されている。国時は肥後延寿派の名工で、康光は備前長船派直系の刀匠として知られる。(2)は二代藩主忠義の奉納で、(3)は十代藩主豊策の奉納によるものであり、いずれも太刀拵に葵紋が配された優品で「糸巻太刀」として名高い。

(二) 土佐の刀工

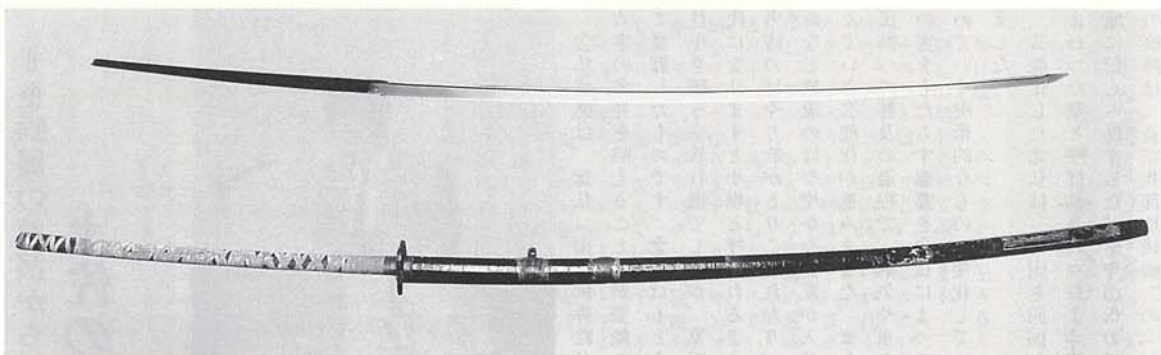
土佐は、古来鉄鉱資源に乏しいためか、古刀期の刀工は数少なく、土佐吉

光の名が知られるくらいである。一説によれば、彼は暦応の頃(十四世紀前半)京から土佐に来て高岡郡浦ノ内に住したという。

新刀期(慶長以降)になると、刀工が先進地より多く来国している。慶長期(十七世紀初頭)には不動義智が備中(岡山県)から石立村(高知市)に入ったといわれ、続いて摂津から吉国・吉行が、河内から国益らが前後して入国、土佐藩の御用鍛冶を務めた。

江戸時代後期には、寿秀や南海朝尊のように江戸や京に出て技を磨く者も現われ、幕末には有名な左行秀がまた、朝尊は『新刀銘集録』の著作で知られ、彼の孫正吉は明治後期の刀工で「土佐鍛冶最後の名工」といわれた。本展では、吉国・国益・吉行・寿秀・朝尊・行秀・正吉の作品のほか、久国・義正・正宣の佳品も展示する。

朝尊の太刀は高知城に常陳されており、御存知の方も多しと思われるが、これより一層長大な太刀がある。それは、高岡郡窪川の中西権七伝説で知られる大太刀(高岡神社蔵)である。拵全長は二・五七メートルに及び、無銘ではあるが古く室町時代の製作と推定されるものである。本資料は、野太刀とか背負太刀に分類されるもので、他に類例が少なく、今回は是非御覧頂きたい資料の一つである。



野太刀〈大太刀〉（高岡神社蔵）

（三）志士の刀剣

幕末——志士の時代には、実用本位の刀が多く作られた。当時の刀は新々刀とよばれ、鎌倉期の古名刀を模範として鍛えられたという。

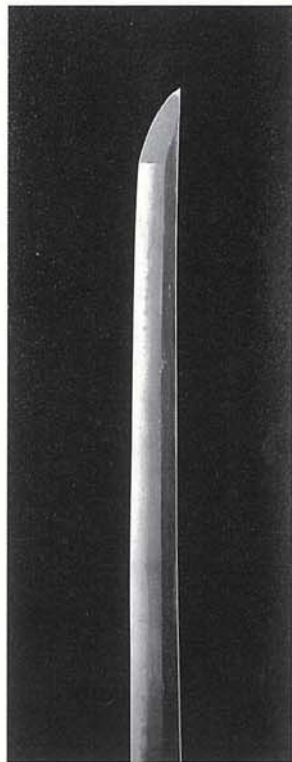
土佐の志士たちは長刀を愛用する風があり、世に「土佐の長刀」と評された。そして、多くの志士が維新を目前にして斃れた。——彼等の多くは、郷士・庄屋クラスの若者であった。

本展において紹介する志士関係の刀剣は次のとおりである。

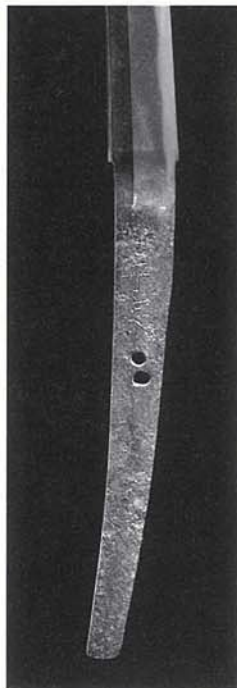
- ・刀 銘肥前河内守藤氏正広
（武市半平太所用）
- ・刀 銘備前国住長船祐定作
（大石団蔵所用、吉田東洋暗殺時に使用したものと同一）
- ・槍 銘肥前国大和太掾藤原兼広
（大石團蔵所用）
- ・刀 銘丹後守兼道
（清岡道之助所用）
- ・刀 銘備前長船助真
（池知退蔵所用）



刀 銘 土佐住上野大掾 木村国益作
（東京国立博物館蔵）



刀 銘相州鎌倉住国秀作
（個人蔵）



太刀 銘 守家
（東京国立博物館蔵）
明治25年明治天皇が後藤象
二郎邸へ行幸したとき、後
藤より献上されたもの。

・短刀 銘文久二壬戌歳太郎朝尊
一生窮力鍛之
（平井収二郎所用）

・刀 銘相州鎌倉住国秀作
（弘瀬健太所用、もと坂本龍馬の佩刀という）

・脇差 無銘（中岡慎太郎所用）

・太刀 銘守家（後藤象二郎旧蔵）

おわりに

今回の企画展開催に関しては、貴重な資料を御提供下さっている所蔵者各位をはじめ、多くの方々から御協力を賜っている。特に、当館運営審議会専

門幹事の山本俊夫氏には、構想段階から一方ならずお世話になった。同氏の御支援がなかったなら本展は実現できなかった、といっても過言ではない。

また、東京国立博物館学芸部の小笠原信夫工芸課長と池田宏主任研究官からも多大な御指導・御協力を賜った。

小笠原氏には「日本人と刀剣の歴史」と題する講演もお願いしている。（十月二十八日午後二時～四時）

右の方々に心から感謝申し上げますとともに、できるだけ多くの皆様にこの刀剣展を御覧頂きたいと願う次第である。

土佐の念仏芸能

高知大学助教授 井出 幸男



リ」「ヒシリ田」「ヒシリ谷」「ヒシリ山」「山伏石」「山伏池」などの地名から伺うことができます。

念仏踊りを踊った場所についても『地検帳』は貴重な情報を伝えてくれます。『一遍聖絵』には踊り堂で念仏踊りを踊っている様子が描かれ、史料にも踊り堂の記述が出て来ますが、その具体的な姿はあまりわかっていません。ところが、『地検帳』には「踊り場」「踊り堂」という地名が多数出てきます。踊り場があったとは言えないわけですが、『地検帳』の踊り堂の地名が現在の念仏踊りに歌いこまれている例があります。「高岡郡佐川郷」の『地検帳』には「仏崎大道二ツ踊り堂懸而」という記述があつて、仏崎という場所に踊り堂があつたことがわかりますが、現在に伝わる佐川町室原の玄蕃踊りの歌詞には、「ここかここか仏崎はここか」「ここよここよ仏崎はここよ」と

念仏芸能は、念仏（南無阿弥陀仏の六字の名号を唱えること）が芸能として発展したものです。念仏はもともと往生を願う宗教行儀でしたが、室町時代になりますと小唄と呼ばれるような当時はやり歌がとりこまれたり、傘鉦など風流のはなやかな意匠が入りこんでいき芸能化が進みました。また、民間への普及の過程で、病氣や虫などの害をもたらす悪霊を念仏によって鎮めていく呪術的なものに変化していきま

芸能化した念仏は、諸国を回回してまわった聖と呼ばれる人々によって各地に伝えられました。聖や山伏の活動の痕跡は『長宗我部地検帳』の「ヒシ

最初に仏崎の地名が出て来ます。踊り堂が念仏踊りと関わりがあつたというひとつの例になると思います。

また『地検帳』の踊り場の地名のあ

る土地に注目すると、シバと表記されている土地が多いようです。シバというのは、土佐方言では荒地地に茂る雑草のことです。美作（現在の岡山県）ではお旅所を芝の字をあててコウゲと読み、そこを人間が耕すとあたりがあるときれています。シバ本来の意味を考えてみますと、芝田楽といって神仏に祈願をする場合は芝で行なう、神事芸能の猿楽も猿楽の芝という場所で行なう。芝という場所は荒地地と同じであつて、人の手が加わっていない、という人が手を加えてはならない聖域であると考えられます。踊りが行なわれた場所も神仏と関わる聖域で、境界さや踊りの意味がよくわかってきます。どこで歌や踊りをしてもいいというのは近代的な考え方であつて、本来歌も踊りも、歌うべき、踊るべき場所で行なう。もつと具体的にいいますと、神仏に関わる機能をもつたものが歌であり踊りであるということなのです。高知県の芸能の中でも窪川町若井の花取り踊りは実際ヒノキの芝で境界した中で踊ります。

聖という人々たちによって踊り場あるいは踊り堂で踊られていた念仏の芸能は、さまざまに形を変えて現在も踊られています。土佐に伝わる念仏芸能を五つに分けますと、A・百万遍（大き

な念珠を繰って百万という無限の数によって阿弥陀仏の利益をこうむろうというもの。土佐町南川など）、B・六斎念仏（持斎を要する六斎日に西方往生を願って行なわれる念仏に由来する。佐川町岩井口の不動明王念仏など）、

C・大念仏（念仏を鉦太鼓で唄い囃すもの。十和村地吉・古城など）、D・念仏踊り（風流化芸能化が進み、念仏以外に当時はやり歌を歌うもの。花取り踊りが代表的、太刀踊りや太鼓踊り、小踊りなども同様）、E・傘鉦（宿毛市沖の島に伝えられる。「沖の島の記」にはオミドンボの踊りとあり、念仏の踊りであつた）などになります。西土佐村のお舟流しや傘鉦などを見ますと、これらは念仏で亡くなった人を供養してあの世に送り届けるといふ、心のこもった手厚い文化ではないかと思ひます。振り返って現在を考えてみますと、我々はこれにかわるような新しい文化を生み出せないままにこうした素晴らしいものを失おうとしているようです。生活がすっかり変わってきていますからこれをそのままの形で受け継いでいくことは難しいと思ひますけれど、せめてこれらの芸能にこめられた心だけは受け継いで、新しい時代にふさわしい念仏の儀礼というようなものを生み出していくべきではないか、と思ひます。

II 企画展の講演からII

チベットに生きる人々

立正大学助手 則武 海源

今日は、「チベットに生きる人々」と題しお話をさせて頂きます。

チベットは、どこにあるかというところ、チベット自治区といわれるところが、チベットと呼ばれています。しかし、チベットという広義の意味、つまりチベット族の住むところというところがかなり広がります。北はモンゴル高原、天山山脈の下のタリム盆地の中にもチベット族は住んでいます。チベットの西の端がり、ネパール・ブータン、シッキム、東は四川省、雲南省、甘粛省、青海省とかなりの広範囲にチベット人は住んでいるのです。

チベット人がどのような考えをもっているのかということについてお話をしたいと思います。チベットにはグライ・ラマという方がおり、現在のグライ・ラマは、十四世であることはよく知られています。グライ・ラマの名称は、モンゴル語の呼び名です。グライとは大海という意味で、ラマはチベット語で上人・智慧を意味します。グライ・ラマという称号は、グライ・ラマ三世ソナムギャツォが、モンゴル布教をした折りに、アルタイ汗からもらったものなのです。

さて、チベットを知るにはチベットの歴史を知ることが必要です。そして

ここでは今回の企画展と関連して、チベットの人たちが、死というもの、そして何を信仰し、何をもたして生きているのかをお話したいと思います。まず、チベットの仏教の生い立ちについてお話をしましょう。チベットの古い文献は、たくさんありますが、その中にチベットにどのように仏教が入ってきたかが書かれています。それらによるとラトトリニヤンツェン王の時代に、天から経典などが入った箱が落ちてきたという伝承があります。これが、伝承によるチベット仏教の始まりとされています。チベットにおいて始めて仏教が表に姿を現すのが、七世紀中葉のソンツェンガンポ王の時代で、この王の時にチベットが統一されたのです。このソンツェンガンポは観世音菩薩の化身として崇められ、今でも信仰の対象となっています。ラサ中心にある大昭寺には、チベット各地から多くの僧や大衆が集まります。ここでは、これらの人々により五体投地が毎日繰り返されています。チベットを理解するには、やはりこのチベットの歴史と仏教

を理解することが先決です。(中略)

さて、この「チベットの死者の書」は、インド古来からの仏教教典ではなく、チベットで作られたものです。この経は、現在チベット人が亡くなると必ず読むと思われていますが、これは間違いです。中沢新一先生が監修されたNHKで放映されたものは、かなり割愛されており、その後の後半部分については、メディアでは放映できない部分も多く含まれています。「チベットの死者の書」は、チベット語で、

「バルドウ・トエ・ドル」といいます。この書を一番最初に英訳したのは、一九二七年のエヴァンス・ヴェンツです。この書を読んだ人物に偉大な心理学者のカール・ユングがいます。カール・ユングは、この書を座右の書としました。なぜ、ユングが座右の書としたのか。それは、臨死体験者がみた内容が、この経に書かれていることと非常に似通っていたからです。つまり体から自分というものが、抜け出て一歩さがったところからみている。何をみているのかというと、六道の輪廻の中などに落ちるのではないかと。最初から十五日目くらいがちょうど六道輪廻を廻る状態です。自分がどこに生けるのかつまり六道の中を魂がぐるぐる廻っている。そして、十五日の間に抜け出れば、その人は仏界に行ける。抜け出な

かつたらどうなるのか。このとき死後の自分をよりよいところにもついでうとすることが、述べられているのです。そこから解脱できなかった人は、成仏しない。そこで、なんとか転生して成仏できるよう再度功德を積むということを説いたのがこの経なのです。

この「チベットの死者の書」は、三部構成になっており、死の瞬間「チカエ」、存在本来の姿「チョエニ」、再生を求める「シバ」の各「バルドウ」すなわち死んでから生まれかわるまでの中間状態よりなっています。人間は菩薩でないために行がたりず、解脱できなかつた。だから、もう一度生まれ変わって、そして行を積んで、徳を積み、始めて解脱できる。これが、「チベットの死者の書」の根本的な考え方なのです。では生前に自分が徳を積みなかつた者は、どうすればよいのか。死ぬときに、どういった徳を積みればいいのかと考えると、この鳥葬は、布施という考え方で行うものなのです。鳥葬は、天葬ともいわれ、これは、チベットのこれら一連の考え方の中からやはり生まれたものです。これらはまた、チベット人の心意識の中に秘められた仏教感でもあるのです。(概要記す)

資料紹介

下田の伝馬船模型 (縮尺 1/5)

中村 淳子

四万十川の河口に位置する下田港は材木や木炭を京阪神へ積み出す港としてかつてはたいへんな賑わいをみせていた。その頃の伝馬船の模型を下田に住む浜口義雄（大正十二年生）さんが作ってくださった。

浜口さんは父の馬之助氏が地曳や一本釣、平舵などの和船をつくる船大工で、尋常小学校に入る頃には父親を手伝うようになった。尋常小学校卒業後、機帆船の船大工の棟梁のもとでも五年ほど働いたが、下田にはその時分、機帆船が四十隻以上あったという。戦時中、浜口さんは佐世保の海兵団で造船に携わり、復員すると五年ほど父親とともに船をつくった。その後は建設会社勤めの傍ら父親を手伝ったということである。

下田にはかつて五十人くらい船大工がいたが、伝馬船をつくる人は少なく、浜口さんの父親は機帆船をつくる棟梁のうちの三人ほどから伝馬船を請け負っていたという。浜口さんは伝馬船をこれまでに十数隻つくった。

船材は目が細かい魚梁瀬杉を高知や須崎で求めたり、西土佐村の黒尊や口

屋内の杉を使い、音に聞こえた日向の杉は目が荒いため使わなかった。

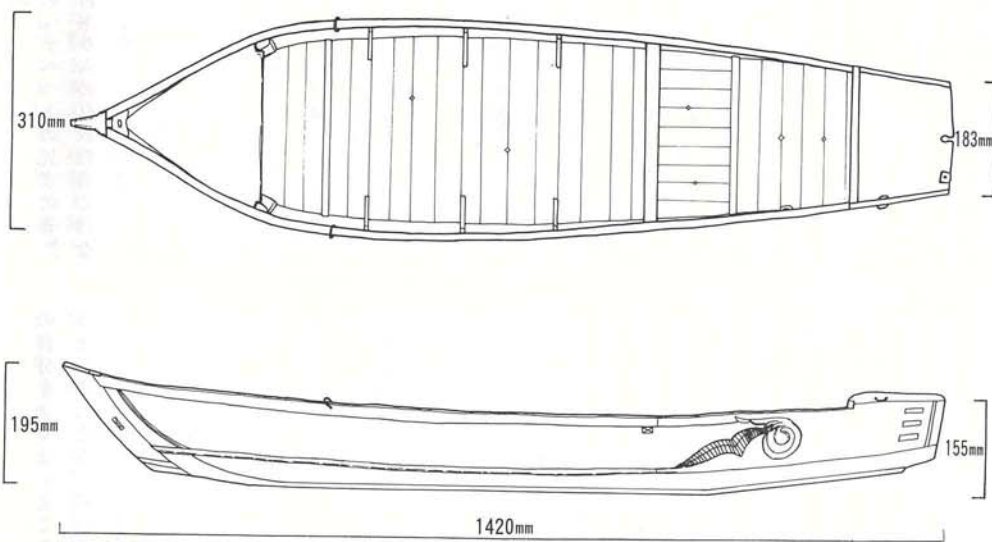
この模型は三百トン型の機帆船に積む伝馬船で、化粧板をはって唐草模様をきいている。船底材には船尾の方に上へ向かって折れたオリという部分がある。「これは秘伝だが」と前置きして、浜口さんは「オリの勾配は尺一寸二分だ」と教えてくれた。さまざまな工夫が凝らされた美しい形である。

伝馬船は船員が上陸する際などの解として使われる他、遭難時に船員が乗る救命艇としても使われた。波に対しても強い造りで、幅が広く前方が膨らんでいる。安芸市立歴史民俗資料館に展示されている伊尾木八幡宮蔵の回船模型の伝馬船も前方に膨らみがあった。回船から機帆船にかわっても、積み込む伝馬船の基本的な形は継承されたのだろう。

浜口さんの伝馬船が活躍したのは機帆船の時代であるが、昭和三十年頃になると、プロパンガスが普及し木炭の需要が減り、材木の方も外材が入ったり、トラック輸送が主になったこともあって機帆船の時代は終わりを告げた。

実物の船が残っていることが一番なのだが、話や文献に登場するだけになり、形がよくわからない船も多い中、

かつての船の姿を私たちに具体的に教えてくれるもののひとつが、こうした船模型である。



寄贈資料紹介

若尾瀾水収集郷土資料

本年六月、土佐出身の俳人若尾瀾水わかおらんすいの収集した郷土資料が高知県立文学館開設準備室と当館へ寄贈された。寄贈者は、瀾水の次男で東海大学名誉教授の若尾慎二郎氏（東京都在住）である。貴重な資料を「県民の財産」として御提供下さった若尾氏に対し、深謝申し上げる次第である。

又吉・竹内けんなん岨南らの書（漢詩）、そして橋本小霞しょうか・山脇信徳の絵画など合計二十四点が収められている。ここでは龍馬の書状を資料写真とともに紹介したい。

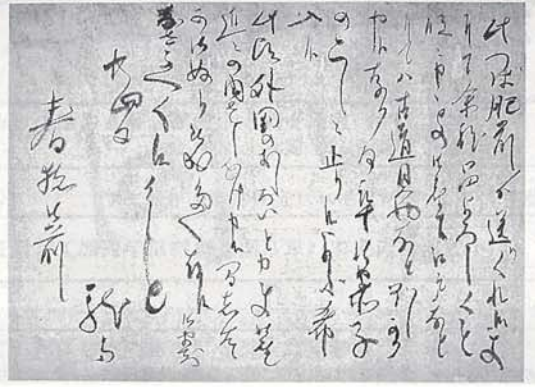
坂本龍馬書状（春猪あて）

此つば肥前より送りくれ候ものにて余程品よろしくと段々申もの御座候、江戸などにてハ古道具屋やなどほしがり申候なり、何卒御養子のこし二止り候よふ希入候

此頃外国のおしろいと申もの御座候、近々の内さしあげ申候間、した、か御ぬり被成たく存候、御まちなさるべく候、かしこ

廿四日 龍馬

春猪御前



当館に寄贈されたのは、書画収録折本一帖である。この中には、坂本龍馬・山内容堂・吉田数馬らの書状、横山

〈注〉春猪は龍馬の兄権平の長女、「御養子」は坂本清二郎。本状は慶応二年秋頃のものとして推定されている。（宮地佐一郎「龍馬の手紙」参照）本資料は平成七年九月二十三日から当館常設展示室（幕末コーナー）にて展示中。

本棚

『土佐の石造遺品集 平安—江戸時代』林 勇作編著

林 勇作刊 B五版 一二五頁 頒価 千円

平成七年二月二日から四月二日まで、中土佐町教育委員会の主催で「土佐の石造遺品展」が開催された。その際に纏められたのが「土佐の石造遺品集 平安—江戸時代」である。

林 勇作氏は、中土佐町教育委員会に勤務のかたわら十数年前から石造物に興味を示され、土佐の石造物を研究されている研究者の一人である。林氏は、平成元年三月に中土佐町教育委員会発行の「中土佐町金石史料」を纏められている。さらに、それから六年後に今回の書が出版された。本書は、林氏の自費出版で、ご家族の協力と理解のもとに刊行されたものであるという。本書は、高知県に所在する主として

中世から近世に及ぶ主要な石造物一二〇点あまりを、写真と拓本そして銘文で「石仏」「中世の無年号石仏」「五輪塔」「一石五輪塔」「層塔」「石臼」「自然石塔婆他」「宝篋印塔」「中世の無年号遺品（宝篋印塔）」「石室（石祠）」「石灯笼・磨崖仏」に分けて紹介し、論攷（再掲載）も載せている。

本書は先に出版された「中土佐町金石史料」と同様に高知県の石造物研究、考古学の基礎的文献として、長く紙価を高めることであろう。また、土佐の石造物を全国で紹介した書として、後世においても高く評価されるであろう。（岡本桂典）



歴史スポット⑦

AVコーナー

二階ロビーの一角にAVコーナーがあります。八本のプログラムをご覧になれます。その中の「館周辺の文化財散歩」は周辺の史跡を散策する前にご覧になると参考になります。小学生には「野中兼山の残したものと」「幕末を駆け抜けた男坂本龍馬」が人気があります。備え付の椅子を取って車椅子のままでも視聴することもできます。

10～12月の催し物

〔企画展〕

10.20～11.26	土佐 歴史と刀剣	土佐の刀工の作品や藩主山内家に係る名品のほか、幕末の志士の刀剣などを展示します。
-------------	----------	--

〔講演会〕 午後2時～4時 聴講無料 葉書にてお申込下さい（定員先着100名まで）

10.28(土)	日本人と刀剣の歴史	小笠原信夫先生（東京国立博物館学芸部工芸課長）
----------	-----------	-------------------------

〔子ども歴史教室〕 当日受付 定員40名

11.11(土)	岡豊城跡たんけん	AM10時 体験学習室集合 中世の山城の構造などを実際にみて探検します。
12.9(土)	火の昔むかし	茅ぶき民家のいろいろのあたたかさや、ランプの明るさ、火おこしなどを体験します。

〔史跡巡り〕

10.21(土)	四国民家村をたずねて	香川県の四国民家村を見学します。
11.23(木)	池川神楽	国の重要無形民俗文化財・土佐の神楽の一つ、池川神楽を見学します。

〔3階常設展示室企画コーナー〕

11.1(水)～	館蔵資料から	館蔵資料の中の考古資料を展示します。
----------	--------	--------------------

〔歴史館日録〕

月 日	出来事
平成七年	
七月一日	企画展「死と再生の文化」開幕
七月二日	企画展講演会「土佐の念仏芸能」
七月二日	企画展講演会「チベットに生きる人々」
七月二九日	博物館実習
八月一日	夏休み子ども教室
八月四日	講座「墓の考古学2―墓標の歴史―」
八月五日	子ども歴史教室「アニメで見る戦争」
八月二日	博物館実習
八月二五～三一日	講座「盆行事に見る土佐の死者の世界」
八月二六日	博物館実習
九月一～七日	企画展講演会「医療人類学からみた日本人の生と死の問題」
九月二日	企画展「死と再生の文化」閉幕
九月一七日	

〔臨時休館のお知らせ〕

開館4周年を迎え、本館の常設展示室のケースや壁面ガラスもだいぶ汚れが目立つようになってまいりました。つきましては、清掃作業等のため、平成7年12月24・26・27日の3日間を臨時休館とさせていただきます。

〔訃報〕

資料調査員の川村義武先生（本川村寺川）が九月六日に亡くなられました。川村先生には開館前から、山の食事模型などで大変お世話になりました。謹んで御冥福をお祈りしたいと思います。

〈ひとこと〉

「刀剣展」と「山内家名宝展Ⅰ・Ⅱ」の準備で頭の中はチャンバラ状態です。学芸員がもう一人ほしいよう。

（下村）

「死と再生の文化」は、難しいテーマなので反応を気にしていたのですが大むね好評だったようです。ご協力頂いた皆様、どうも有難うございました。

（梅野）

夏の企画展「死と再生の文化」が閉幕しました。県内外から色々な方にご来館いただきました。死の文化は、多種多様なものがあります。それは、人間の死への意識の多様さも表わしています。担当者も多くのことを学ぶことができました。有難うございました。

（岡本）

平成七年十月一日	高知県立歴史民俗資料館
編集・発行	〒783南門市岡豊町八幡1099-11
TEL	0888(6)22111
FAX	0888(6)22110
開館時間	午前9時～午後5時
	（入館は午後4時30分まで）
休館日	毎週月曜日（祝日及び振替休日）
	あたる場合は火曜日（12月28日）
1月4日	
入館料	大人（18才以上）400円
	団体（20人以上）320円
	高校生以下は無料
	療育手帳・身体障害者（1・2級）手帳所持者とその介護者（1名）、高知県長寿手帳所持者は無料。
	印刷・川北印刷株式会社